

魂振の飛鳥宮都

寺川 眞知夫

(はじめに) 明日香京前史

本稿では飛鳥宮都を支えた信仰とのかかわりで飛鳥宮都の景物の一部をなした樹と石を取り上げていささか考察をくわえてみたい。

飛鳥時代は、古代飛鳥の範囲の認定と密接にかかわっており、それとの関係で揺れを生じる場合もある。『国史大事典』（昭和五十四年三月）の「あすかきょう」（直木孝次郎担当）が指摘するように、下ツ道と中ツ道を何らかの基準とする地域とみると範囲はやや広くなり、第四代懿徳天皇の軽の曲峽宮（懿徳紀二年）、第八代孝元天皇の軽の境原宮（孝元紀四年）、第十五代応神天皇の軽島の明の宮（応神記条）、もちろん允恭天皇の遠飛鳥宮（允恭記条）も入る。これらを含めると地域だけでなく、時代的にもやや曖昧なところ生まれてくる。しかし、飛鳥の中心を香具山の南に広がる小盆地とその周辺とみ、飛鳥を冠した宮とその周辺の宮に限定すると、顕宗天皇の八釣宮を含めて、地域的に集約され、天皇は実在性の強くなる継体天皇以後に限定すると時代的には連続的になる。すなわち推古天皇の豊浦宮の時代から天武・持統天皇の浄御原宮までの時代、やや広げても文武天皇の藤原京とその時代までになる。このように飛鳥地域および飛鳥時代をどのように限定するかで揺れも生じるが、ここでは後者に限定しておきたい。

狭い意味での飛鳥の宮を時代順にたどってみると、考古学的にはほぼ確かとみなされている最も古い宮は、推古天皇の豊浦宮である。豊浦宮は飛鳥川の西、甘樫丘の北、向原寺の地下に発見された石敷き遺構をもつ建物とみなされるので、香具山の南の盆地の範囲から外れかねない。推古天皇の小治田宮はかつて豊浦宮の北とみられていたが、近年の発掘ではそれらしい遺跡は確認されておらず、雷丘東麓遺跡から奈良時代のものながら小治田宮の墨書土器が出たので、飛鳥川の東、雷丘の東麓と推定されるに至っている（明日香村教育委員会『雷丘東方遺跡発掘調査概報―村道耳成線道路改良事業に伴う調査 第3次 昭和62年度』一九八八年二月）。ここは狭い意味での飛鳥に入る。

推古天皇の次の舒明天皇の宮は岡本宮で、いわゆる飛鳥の深奥部、岡寺の下に営まれたとみられている。以後、皇極天皇の川原板蓋宮、斉明天皇の後岡本宮、天武天皇の飛鳥浄御原宮、持統天皇の飛鳥浄御原宮もほぼ同じ地域に営まれたと推定されている。持統天皇は後に天武天皇の遺志を継いで阿倍山田道の北、香具山の西に藤原京を造営する。推古朝に飛鳥のある意味で中央部に飛鳥寺（元興寺）が建立されたので、飛鳥に宮の地を選ぼうとすれば、飛鳥寺の北か南になる。天武天皇は都市を計画したとき、飛鳥寺の南の地を離れて、広い意味では飛鳥に入るにしても飛鳥川の東北、香具山の北西にかかるあたりの広い藤原を選んだ。文武天皇は祖母持統天皇が天武天皇の構想を実現した藤原京で治めた。その母、元明天皇は平城京に移り、完全に飛鳥の地を離れる。もっとも舒明天皇以後も旧日本によると皇極天皇は一時難波宮、孝徳天皇も難波宮、斉明天皇は百濟救援のために、七年に筑紫の朝倉宮に移り、次の天智天皇は大津宮を営んでいて、一四年間は難波・朝倉・大津に移っており、継続的に飛鳥に宮が営まれたわけではない。ただ、白雉四年に斉明・中大兄は難波宮から飛鳥河辺行宮に引き上げているし、大津宮の時代にも壬申の乱の勃発のとき飛鳥には留守司高坂王がいたように、飛鳥に宮殿が維持されていたとみることができる。したがって、飛鳥の一角に宮が設けられたといった状態も含めて、推古天皇元（五九三）年、豊浦宮が営まれてから持統天皇の八（六九四）年藤原京に移るまで約一〇一年間、広い意味での飛鳥である、藤原宮での一六年間を加えると、元明天皇の和

銅三（七一〇）年に平城京に遷都するまで一一七年間、飛鳥に宮廷および関連施設がほぼ恒常的に維持存続されたといえる。平城京以前では異例ともいえるほど長期間一定の地域に宮廼が置かれたのである。このように、飛鳥という特定の地域に宮が設けられたことで、飛鳥の景観は大きく変わったとみられる。その変化はどのようなものであったのであろうか。

（一）飛鳥の景観の変貌

推古天皇の豊浦の宮が置かれるまでの飛鳥の小盆地はどのような景観であったのであろうか。推古天皇以前から、飛鳥の桧隈地域には東漢氏が住まわされていた。それが何時からなのか不明ながら、桧隈の南部、観覚寺遺跡からはオンドルの設備をもつ総壁作りの家跡も発見されている（高取町教育委員会『高取町文化財調査報告 観覚寺遺跡発掘調査報告書』二〇〇五・三）。『日本書紀』に東漢氏の名がみえるのは、雄略天皇七年八月の記事である。この時、東漢直は桧隈地域に居住していたとみられる内容である。その記事は、

天皇、大伴大連室屋に詔して、東漢直^{つか}に命せて、新漢陶部高貴^{いまきのあやのすゑつくりかうく}・鞍部堅貴^{くらつくりのけんく}・画部因斯羅我^{ゑかきいんしらが}・錦部定安那錦^{じやうあんなこむ}・訳語卯安那等^{をさしうあんな}を、上桃原^{はべ}・下桃原^{はべ}・真神原の三所に遷し居らしむ。

（雄略紀七年八月条）

という。東漢直は飛鳥の先住民として渡来系の人々の受け入れ役となり、桃原と真神原に新来の技術集団を定住させたという。飛鳥はこれら渡来系の人々の入植によって開拓されたことを暗示し、先だつ日本人の居住には言及しない。桃原には後に蘇我馬子の嶋の別邸がおかれ、真神原は時代が降るものの元興寺造立記事において、

是歳、（中略）飛鳥衣縫造が祖樹葉の家を壊ちて、始めて法興寺を作る。此の地を飛鳥の真神原と名く。亦是飛鳥の苦田と名く。（崇峻紀元年条）

とみえる。これによれば飛鳥衣縫造が住んでいたことは確かであるが、雄略七年の今来の人々の入植よりは遅れて住み着いたとみられる。それというのも、雄略紀は十四年正月条に身狭村主青等が呉国の使とともに帰朝したときのこととして、呉が漢・呉織とともに献った衣縫の兄媛・弟媛等のうち、兄媛は三月に大三輪神に奉り、弟媛は漢衣縫部としたとあり、さらに漢織・呉織の衣縫は飛鳥衣縫部・伊勢衣縫の祖であるとするからである。飛鳥衣縫造が飛鳥の真神原に住み着いた時期は明らかではないが、雄略天皇七年の条にみえた人々とは別系統ながら、さまざまな渡来系技術を保持する人々が居住していたので、衣縫造たちも飛鳥真神原を選んで住み着いたものであろう。

ところで、大口の真神原の地名については、『枕詞燭明抄』中所引大和国風土記逸文に、

むかし明日香の地に老狼在て、おほく人を食ふ。土民畏れて大口の神といふ。其の住む廼を名けて、大口真神原号ふと云々。

とある。これは引用に際して書き替えられたものか、大化三年四月壬午の詔に、「率土の民の心」という表現はともかく、「土民」のように古風土記らしくない表現もみえる。これは何時の時代のことは不明で、真神原の名から逆に形成された伝承であったのかもしれない。すくなくとも、狼の被害が語られるのは人が住んでから後のことになろう。

先の飛鳥元興寺建立記事で今一点、真神原を飛鳥の苦田といったとする点に注目してみると、この地域では飛鳥川に木の葉堰を設け、飛鳥川の水を川の東に引いて、畦で区画した小さな水田を開いていたことを暗示する。ここから南に朝鮮系の製陶、鞍作、画業、機織、通訳などの専門技術集団が居住するとともに土木技術ももっていて堰を設け、田を拓いていたということなのであろう。雄略朝か

ら推古朝までの間に飛鳥は渡来系の技術集団によって開発され、彼らが住み着くことによって先進工業と確かな生活基盤をもった場所となっていたとみられよう。

蘇我馬子が衣縫造樹葉を立ち退かせて、氏寺としての役割も担う法興寺（元興寺・飛鳥寺）建立の場所として真神原を選んだのは、桃原に蘇我氏の嶋の別業があっただけでなく、仏教になじんだ渡来系の人々が住み、仏教受容、寺院建立に比較的抵抗の少ない地でもあったからであろう。加えて仏教に理解のある天皇の宮を飛鳥寺の付近に誘い、仏教によって荘厳された新たな宮処を造ろうする意図をもっていた可能性もある。

法興寺の建立は豊浦宮の造営におくれ、書紀にはさきのように僅かの記事しか残さない。法興寺が創建された事情については、崇峻天皇即位前紀は崇仏排仏の争いを契機としたとしている。すなわち崇仏派蘇我馬子が崇仏排仏の争いに際して、

蘇我馬子大臣、又誓を発てて言はく、「凡そ諸天王・大神王等、我を助け衛りて、利益つこと獲しめたまはば、願はくは当に諸天と大神王との奉為に、寺塔を起立てて、三宝を流通へむ」といふ。という祈願を実行して建てた寺であったと記す。もっとも、書紀の法興寺建立記事は衣縫造の家を壊したことだけを伝える。これに対して、平安時代末に成立した説話集『今昔物語集』は何に依拠するのか、元興寺縁起の流れを汲むものか、建立者を馬子ではなく、推古天皇とし、飛鳥寺の地には「当ニ生ケム世モ不知ズ古キ」榎の大木があり、この木を伐ろうとすると、それに携わる樵が何物かに取り殺されるので、恐れていたとき、たまたま木の本に宿った僧が木の精霊の会話を聞いて、「麻苧ノ注連ヲ木ノ本ニ引廻テ、木ノ本ニ米散シ幣奉テ、中臣祓ヲ令読テ、柚立ノ者共ヲ召テ、繩墨ヲ懸テ令伐ルニ、一人モ死ヌル者无」く、「木漸ク傾ク程ニ、山鳥ノ大サノ程ナル鳥五六計、木末ヨリ飛立テ去ヌ。其後ニ木倒レヌ。皆伐リ揮テ御堂ノ壇ヲ築ク。」といい、「其鳥共ハ南ナル山辺ニ居」たという話（『今昔物語集』巻第十一、第卅二語）を伝える。これは、仏教が在地の神の抵抗を克服し、その布教を広めていく話の一つの型に即した縁起とみることができる。しかし、内容からしても時代的には降のようにみえる。

ただ、榎の大木は今でも神社に多く、飛鳥寺の西には榎の木があったというから、法興寺の地に樹木崇拝の対象とされる木があったというのは理解できる。このような榎の大木が衣縫造の家にあったとすると、飛鳥に入植した渡来系の人々は朝鮮半島のシャーマニズムにみえる樹木信仰によって、大きな榎の木を伐ることなく残していたことを語るものでもある。飛鳥寺建立に際して敷地にあった榎が伐られたのは古い信仰を克服するためであるが、なおそこから外れる木は信仰の対象として残されたのであろう。飛鳥寺の西に榎（櫨）の茂る広場が作られ、天武紀や持統紀には多禰嶋人や蝦夷の人々を接待する儀礼としての宴が行われたことを伝える。今となっては想像する他ない景観であったといえる。今昔の飛鳥寺建立伝承は説話の性格からして、伝承経路の不明な後代の伝承であるとしても、それなりに古代日本人の信仰をふまえて展開された、仏教布教の核心をついた話であったことを思わせる。ともあれ、精霊の宿る榎の古木が広場の東に続く飛鳥寺の敷地にあり、この榎を切り倒して広い敷地をもつ飛鳥寺が建立されたことは想定してよく、それら榎群から抜きんで、古来の精霊信仰を威圧するかのよう高い仏塔が立てられたのである。これによって飛鳥寺は仏教信仰の新たな中心的シンボルとなり、飛鳥もまた仏教で荘厳された都市としての景観を有することになる。元興寺はその名前のごとく、時代と世界を切り開く象徴的景観としての意味も担い、飛鳥の新たな夜明けを告げる、景観を生み出す契機となったことは確かであろう。

もっとも、これより先に飛鳥には向原寺（豊浦寺）や橘寺が建立されていた。そこに元興寺が導火線となってさらに大官大寺、奥山久米寺、川原寺、岡寺、坂田寺、やや外れて山田寺、紀寺、薬師寺、

定林寺、桧隈寺などが建立された。飛鳥は都となるとともに仏教文化の中心地としての様相もみせた。

以上にみたように、飛鳥はまず仏教によって荘厳された都として展開されたといえる。では、飛鳥を支えていた思想は仏教だけであったのであろうか。それも確かなことであるが、改めてここで注目したいのは、一部が伐られたにしても、他方で、飛鳥寺の西の広場に残された槻である。この槻は寺院の側に残って新たな仏教のシンボルと共存し、日本固有の信仰を温存するものとしての、特徴的景観を保っていたこともまた確かであろう。そこで、次にこの飛鳥における槻の意味するものについても注目してみたい。

(二) 飛鳥の木の担う意味

現在も、日本にはさまざまな巨木が存在する。日本の古代には、タブが叢林を形成していたといわれる。しかし、その巨木はあまり残っていないようである。またタブの古木は槻や楠、杉に比べるとやや小さいようにみえる。人間の生活の場に近い神社の叢林を形成している巨木は、全国的には主に杉と櫟、近畿地方南部から西では楠の巨木が目立つ。もとより社叢の樹種も、例えば青岸渡寺や籠神社にタブの大木があるように、さまざまである。その中でも、高さでは杉（高知県長岡郡大豊町杉の大杉・五七メートル）、幹周りでは楠（鹿児島県始良市蒲生の大楠・24・2メートル）に一步を譲るようである。櫟の巨木もこれに次ぐ。櫟の巨木では目通り幹周りが十七メートルあるもの（秋田県大館市出川の櫟）や高さが四十メートルあるもの（長野県東御市中屋敷熊野神社の櫟）もあるが、多くは幹周り一五メートル以下、高さ三五メートル以下であるようである（全国巨樹探訪記<http://www.hitozato-kyoboku.com/index.html>）。飛鳥の槻がどの程度のものであったかは不明ながら、古来の樹木信仰にささえられて樹神としてまつられたり、その生命力が讃えられていたとみることはできる。高御産巢日神を記は高木の神といいかえるが、五十メートルを超える高木は、日本における生成の霊の極点を示すと理解してよい。高木の杉が伊勢神宮をはじめとする古社の社叢を形成し、高木・巨木が神として祭られる所以でもある。もちろん、槻も社叢の重要な構成樹種であり、記紀や万葉集にも槻は触れられる。

巨樹はさまざまな相貌をもつが、その一つとして、いつの時代においても木が育ち生きてきた時の記憶を担い、日本においては古い時代の信仰の橋頭堡としての役割を担ってきたことである。それゆえ、新たな文化を受容する者は、それが担う過去を消し去るために木を伐る。仏教系の伝承において、木を伐って寺、塔を建てる話はそうした意味をもつ。『今昔物語集』が語る飛鳥寺を建てる話でも、切り倒そうとする木挽きを殺す槻の大木の話があることは先に触れた。仏教興隆期の神仏の対立の様相が浮かび上ってくる話である。

いま一つは巨木は先に触れたように生成力の極点を示し、神ともされる。古代人はまた長寿、生命力の強さにも意味を見いだしていた。

槻の大小は不明であるが万葉集にも槻は見え、その具体的な地名とかかわるものを拾うと、次のようなのがみえる。柿本朝臣人麻呂之歌集歌にはよく知られた纏向の由槻が嶽（大和国卷向 七一〇八七・八）、同じく柿本朝臣人麻呂之歌集歌には雄略天皇が豊楽をした長谷の百枝槻（雄略記）を意識したかと思われる長谷の斎槻（一一一三五三）がみえる。さらに作者不記載歌群の中には軽の社の斎槻（一一一二六五六）を詠んだ歌もある。また家持は自らの庄の門の槻の樹の下（二〇一四三〇二）で宴したときの歌を残している。場所を特定することはできないが、他にも斎槻や小槻が詠まれる。これらによれば、大和の槻は飛鳥に限られるものでなかったことも確かである。

『日本書紀』には、①用明天皇の「池辺の雙槻の宮」（用明紀元年九月条）、②蘇我馬子の「槻曲の家」（用明紀二年四月、所在不明）、③「法興寺の槻の樹」（皇極紀三年正月乙亥朔）、④「大槻の樹」（皇極紀四年六月乙卯、所在明記せず）、⑤「今來の大槻」（孝德紀大化五年三月戊辰、横大路から阿倍山田道に入る道沿いか）、⑥田身嶺の「両の槻の樹」・「両槻宮」（齊明紀二年是歲、持統紀十年三月乙巳）、⑦「飛鳥寺の西の槻」（天武紀元年六月己丑、六年二月、九年七月甲戌、持統紀稱制二年十二月丙申、九年五月丁卯）がみえる。これらはほぼ飛鳥に集中する。このうち③と⑦は同じとみられる。ともあれ、これらの槻は飛鳥もしくは飛鳥周辺の、新たな装いの中にあつてなお、日本古來の、古い時代の景觀や樹木信仰を温存していたことを示していたといえる。つまり、木は飛鳥の古い記憶を保持し、古い顔を覗かせるものとして生き延びていたのである。

さて、①であるが、池辺の雙槻の宮は狭い飛鳥から外れているが、香具山の東北部に接する。②の位置は明確ではないが、③は飛鳥の中央部を占めている。①②③⑥は槻のあるところに宮や寺を設けている。こうした樹のある場所に宮などを設けた意味は何であろうか。神木といい聖樹といい、その木に期するものがあつたのであろう。特に⑥の田身嶺の両槻のもとに觀を立てたのは、山巔は天の氣を享けるのに相応しい場所であつたと説きえるが、両槻は用明天皇の宮の場合と同じく、樹のもつ生命力に期待するところがあつたとみることができる。これは古代の信仰とかかわろう。すくなくとも、ここにあげた諸例の槻は特別の力をもつ樹とみなされ、その力に期待するところがあつたからであらう。槻が特別の力をもつと考えられていたことは、⑦の槻にかかわる、

飛鳥寺の西の槻の枝、自づからに折れて落ちたり。 (天武紀九年七月甲戌条)

という記事が暗示している。槻の枝が折れたことが問題視され、記録され、さらに正史に記されたのは、この樹がただの樹ではなかつたからである。書紀に樹の姿が記されることはなかつたが、これはやはり大きな木であり、聖なる樹とみなされていたとみてよい。先に触れたが、天武天皇六年二月条には、

是の月に、多禰嶋人等に飛鳥寺の西の槻の下に饗たまふ。

持統天皇稱制二年十二月丙申条には、

蝦夷の男女二百一十三人に飛鳥寺の西の槻の下に饗たまふ。仍りて冠位を授けて、物賜ふこと各差有り。

とあつて、飛鳥寺の西の槻の下で饗が行われたことがみえる。ただし、天武紀・持統紀にともに他にも宴・饗の記述が多くあり、飛鳥寺の西の槻の下での宴が、他に繰り返し行われたわけではない。むしろ大安殿の南庭など、場所は多様である。それにもかかわらず、季節的には外での宴に相応しい時期であつたようには思われない天武天皇六年二月や持統天皇二年十二月に多禰嶋人や栗の巨木の中に生きていたであろうや蝦夷の人々に対してのみ飛鳥寺の西の槻のもとで宴が行つたのは、雄略天皇が初瀬の百枝槻のもとで新嘗祭の豊樂をしたとき、杯に落ちた槻の葉のもつ力を歌つた三重の采女のように、彼らが巨樹への信仰心を持ち、巨樹の下での宴に意味を認める人々であつたからであらう。彼らには自然の中での宴、生命力に満ちた木の下での宴が有効な接待になると考えたからであるように思われる。

飛鳥では、槻の木の生命力に触れられることはないが、今触れた雄略天皇の長谷の百枝槻の下での豊樂では槻の靈性が暗示される。すなわち、よく知られているように、雄略天皇に仕えた采女がこの宴で槻の葉が盞に落ちて浮かんでいるのに気づかないで献つたために、これを見とがめた天皇の怒りに触れ、首を斬られそうになつた時、采女は、よく知られた歌、

纏向（まきむく）の 日代（ひしろ）の宮は

朝日の 日照（ひで）る宮
夕日（ゆふひ）の日がける宮
竹の根の 根垂（ねだ）る宮
木（こ）の根の 根蔓（ねば）ふ宮
八百土（やほに）よし い築（きづ）きの宮
真木（まき）さく 桧（ひ）の御門（みかど）
新嘗屋（にひなへや）に 生（お）ひ立（だ）てる
百足（ももだ）る 槻（つき）が枝（え）は
上枝（ほつえ）は 天（あめ）を覆（お）へり
中つ枝（え）は 東（あづま）を覆（お）へり
下枝（しづえ）は 鄙（ひな）を覆（お）へり
上枝（ほつえ）の 枝（え）の末葉（うらば）は
中つ枝に 落ち触（ふ）らばへ
中つ枝の 枝（え）の末葉（うらば）は
下（しも）つ枝（え）に 落ち触（ふ）らばへ
下枝（しづえ）の 枝の末葉は
あり衣（きぬ）の 三重（みへ）の子（こ）が
指拳（ささが）せる 瑞玉盞（みづたまうき）に
浮きし脂（あぶら） 落ちなづさひ
水（みな）こをろこをろに 是（こ）しもあやに恐（かしこ）し

高光る 日の御子 事の語言（かたりごと）も是（こ）をば (記一〇〇)

を歌う。この歌では木の生命力は説いていないが、盞に浮かぶのは天・東・鄙を覆う大きさを支える生成力の凝縮した木の葉であるが故に、天皇に献る酒にその力が移っていると、国生み神話の記憶を呼び覚ますような表現を用いて歌い、天皇もこれを嘉して許したとする。この話では雄略天皇が長谷の槻の下で豊楽を催した意味が明かされているわけではない。しかも、槻の大木の下で宴すると、場合によってはその葉が落ちてくることは予想されないわけではない。それにもかかわらず、槻の葉が盞に入ったことを責めており、三重の采女に説明されてはじめて雄略天皇は槻の葉のもつ意味に気づいたとしている。これによってみると、単純に大槻のもつ生命力を云々すべきでないかもしれない。しかし、三重の采女にその意味を明かされたとき、それを受け入れているのは、樹木の有する生命力、木の記憶のもつ意味を理解し、受け入れる信仰が天皇にもあったということになる。また、こうした歌と物語を伝承した人々、またこれを記に位置づけた天武天皇にも同様の信仰は生きていたとみてよからう。

そうした槻はいまみたように生命力に満ちた樹とみなされるが、こうした大樹のほかにも、先にみた万葉集の人麻呂の歌には、挽歌ながら、

うつせみと 思ひし時に〈一に云ふ、うつそみと思ひし〉 取り持ちて わが二人見し 走出の
堤に立てる 槻の木 の こちごちの枝の 春の葉の 茂きが如く 思へりし 妹にはあれど た
のめりし 児らにはあれど (二一〇)

うつそみと 思ひし時 携へて わが二人見し 出で立ちの 百枝槻の木 こちごちに 枝させ
る如 春の葉の 茂きがごとく 思へりし 妹にはあれど (二一三)

といった表現がみえる。「堤に立てる槻の木」あるいは「百枝槻の木」を人麻呂は妻とともに見てき

たという。これらの木も妻との生きた時の記憶を呼び返す。しかも、この木を見る行為はまた「魂振」であったことは土橋寛氏の指摘されたところである（「国見の意義」『古代歌謡と儀礼の研究』一九四〇年一二月）。先にみたように、その木の生命力は大木であることによってより強いと考えられていたとすると、飛鳥の大木もその見、触れる魂振に用いられる木として注目されていたとみてよい。飛鳥寺の西の槻などもそうした木であり、その下で宴することに意味があると考えられていたとみることができる。

ここでは、飛鳥寺の西の槻を中心に飛鳥の木のもつ性格をみてきたが、飛鳥が他の地域と全く異なる景観をもつとすれば、日本古来の掘立式ではあるが、大きな宮殿建築をあげることができよう。それとともに仏教とともに導入された寺院建築という高い建物の多さであるが、その他に注意すべきは、鹿深臣が百濟から持ち帰り、馬子の宅の東に造られた仏殿に安置された弥勒の石像の他、庭園等に配された石像物、さらに宮殿建築の周辺を中心にひろくなされた石敷きをあげることができよう。そこで、次にそれら飛鳥に配された石のもつ意味についても考えてみたい。

（三）飛鳥を支える石の文化の基底

岸俊男氏の説によると、飛鳥は飛鳥の中心を通る中つ道をほぼ中心線として都市計画がなされていたといわれる（岸俊男『日本の古代宮都』一九九三年五月）。発掘によって、飛鳥の宮殿は板蓋宮のある地域に繰り返し建てられたといわれるが、豊浦宮以来、飛鳥の宮殿には敷石がされていた。現在、復元された様子を目にすることができるのは、板蓋宮跡の一部である井戸の周辺、あるいは豊浦宮の跡とみなされている向原寺の西南隅の覆屋、かつて浄御原宮跡かとされた石神遺跡の一角とみられる明日香村埋蔵文化財展示室の敷地の東北隅などである。石敷には今のアスファルト敷きと同じく、水位の高い飛鳥の、雨降りの際のぬかるみを防ぐことができるという、実利的な目的があったとみることもできるが、千田稔氏は「百磯城の大宮」という枕詞に触れながら神仙思想と繋がる石の聖性を認定されている（中公新書『飛鳥一水の王朝』二〇〇一年九月）。この説は基本的には首肯すべきものと思われる。ただ、今一つ石に対する日本古来の信仰にも注意すべきであろう。

飛鳥にはこの他、石像物もかなり目につく。おそらく庭園における飾り物なのであろうが、二つの酒船石、猿石、二面石、マラ石、亀石、亀形石像物、石神、須彌山石など多くのものがある。高松塚古墳などの壁画の方は現代の感覚に近いが、石像物の多くは、庭園を飾るものとして置かれたとすると、その趣味はいささか現代の感覚からは遠いところもある。しかし、それらも含めて、柳田国男が指摘したように、石は生命力をもち、生成するものとする信仰（「生石伝説」『柳田国男集』第五巻昭和37年9月）もその中に秘められていると考えるべきかと思う。

飛鳥の都は、このように石の生命力によって荘厳された地でもあったというべきであろう。なかでも現実世界をその石の生命力で荘厳することに心を向けたのが斉明天皇ではなかったかと考える。こうしたところに目を向けて、古代飛鳥の景観の一面に触れてみたい。

齊明紀には、

①田身嶺に、冠らしむるに周れる垣を以てす。田身は山の名なり。これをば大務と云ふ。また、嶺の上の両つの槻の樹の辺に、観を起つ。号けて両槻宮とす。または天宮と曰ふ。（齊明紀二年是歳）

という記事、続けて、

②時に興事を好む。すなはち水工をして渠を穿らしむ。香山の西より、石上山に至る。舟二百隻を以て、石上山の石を載みて、流の順に控引き、宮の東の山に石を累ねて垣とす。時の人の誇り

て曰はく、「狂心の渠。功夫を損し費すこと、三万余。垣造る功夫を費し損すこと、七万余。宮材爛れ、山椒埋れたり」といふ。又、謗りて曰はく、「石の山丘を作る。作る随に自づからに破れなむ」といふ。若しは未だ成らざる時に抛りて、この謗を作せるか。(齊明紀二年是歳条)

という記事がみえる。

後者の渠を掘ったこと、石を運んだことは、齊明天皇の牟婁の湯への行幸中に、蘇我赤兄が孝徳天皇の皇子有間皇子を唆して謀反を勧めるべくあげた天皇の三つの失政のなかの二つとしてあげられてもいるが、すでに履中紀には、

冬十月に、石上溝を堀る。(履中紀四年条)

とあって、水路は齊明天皇だけが作ったものではなかった。

それはともかく、①と②は『古典文学大系日本書紀』の頭注にもみられるように、一連の記録として読まれることが多い。しかし、私見では、①と②は分けて読み、別々の二つの記述として理解すべきであると考え。すなわち、①は多武峰に設けられた両槻宮の記録、②は宮の東の山すなわち酒船石のある山に石垣をめぐらせて宮を作った様子を述べたものと理解すべきであるということである。ここを一連のものともみたために問題視されてきたのである。

①の「観」とされる両槻宮は道観(道教寺院)と関係があるとみられている。道教的な性格をもった宮と理解してよい。中国の山岳寺院には道教寺院もある。これらは展望の良さを愛でる場所としてと同時に大自然の、天の気と交感する施設として造られたものであろう。

持統天皇はその在位の終わりの頃、

三月の癸卯の朔乙巳に、二槻宮に幸す。(持統紀十年条)

とあるように、一度はここを訪ねている。しかし、持統の関心は、両槻宮よりも吉野にあったようで、在位中を含め、吉野に三十一回も訪れている。天武天皇との思い出の場所ともいわれるが、吉野の宮滝の景観に関心があり、ここに設けられた離宮に赴いたのであろう。この宮滝の地は吉野川の両岸に岩盤が露出して続いており、これと神仙思想とのかかわりを想定する説は当然ある。齊明・持統の重層する離宮跡が現在、宮滝の梅谷醸造あたりで発見されている。この東から南に流れる吉野川の東西に続く河床が岩盤となって広がっており、その上を清らかな水が流れ、人麻呂の吉野讃歌に歌われるとおりの景観がいまも残る。持統天皇にとっては、両槻宮より、吉野の方が心惹かれる場所であったのである。その意味は、聖なる水に対する関心もあったにしても、むしろ磐の露頭、常滑に関心があったように思われる。磐に関しても神仙思想との関係が言及される。ただ『万葉集』には、

① 泉川にして作る歌一首(柿本人麻呂歌集歌)

妹が門 入り泉川の 常滑に み雪残れり いまだ冬かも (九一一六九五)

といった歌、あるいは、

② 隠口の 豊泊瀬道は 常滑の 恐き道そ 恋ふらくはゆめ(柿本人麻呂歌集 一一一二五一一)

といった単なる景としての磐、あるいは滑りやすく用心すべき場所として詠んだ歌もあるが、巖はたとえば、

③ 十市皇女、伊勢の神宮に参赴りし時、波多の横山の巖を見て吹芟刀自の作る歌

河上の ゆつ岩群に 草生さず 常にもがもな 常処女にて (一一二二)

のように、草の生えない磐を「神聖な岩群」といい、永遠の若さを見せるものとして詠んだ歌もある。また、

④ 市原王の、宴に父の安貴王を捧ぐ歌一首

春草は 後はうつろふ 巖なす 常磐に坐せ 貴きわが君 (六一九八八)

の歌のように、巖を永遠の生命をもつとみて詠み込んだ歌もある。柿本人麻呂の吉野讃歌、

⑤ 見れど飽かぬ 吉野の河の 常滑の 絶ゆることなく また還り見む (一一三七)

でもまた常滑が途絶えることのない、永遠性を有するものとして歌われている。この三七番歌は吉野讃歌の反歌であり、宮滝の広大な岩の路頭を詠んでいるとみてよい。常滑は永遠なのである。が、磐は我々のみるのとは異なる性格をもつものとして、古代の人々がみていたことは、柳田国男の説いたところである。柳田は生石伝説について論じ、

⑥ 君が代は千代に八千代にさゝれ石の巖となりてこけのむすまで

を例にあげて、石は霊を含み生長するものと古代人はとらえていたとした(前掲「生石伝説」)。この歌はいうまでもなく、『古今集』の、

⑦ わかきみは ちよにやちよに さされいしの いはほとなりて こけのむすまで

(古今和歌集卷七賀 三四三 題知らず 読み人知らず)

の異伝歌である。この「さざれ石」の生長した一つの極点、岩盤である常滑はまさに永遠の生命の象徴となる。

記の神話には、木花之佐久夜毘売と石長比売の物語があり、天孫番能迹々芸能命に奉った石長比売が醜いという理由で返されたことをひどく恥ぢた大山津見神の言としての、

我が女二り並べて立奉りし由は、石長比売を使はさば、天つ神の御子の命は、雪零り風吹くとも、恒に石の如くに、常はに堅はに動かず坐さむ。また木花之佐久夜毘売を使はさば、木の花の栄ゆるが如栄え坐さむと宇氣比呂貢進りき。かくて石長比売を返さしめて、独り木花之佐久夜毘売を留めたまひき。かれ、天つ神の御子の御壽は、木の花の阿摩比能微坐さむ。(記神代)

という言葉が展開される。これに対し、紀では磐長姫がやはり返されたことをひどく慙ぢて詛をし、

仮使天孫、妾を斥けたまはずして御さましかば、生めらむ児は寿永くして、磐石の有如に常存らまし。今既に然らずして、唯弟をのみ独り見御せり。かれ、その生むらむ児は、必ず木の花の如に、移落ちなむ。(紀神代第九段一書第二)

といったとする。これは東南アジアに分布するバナナ型の人間の命の短くなった由来をとく神話が、天神の子孫として位置づけられた天皇の寿命が短命になった理由を説明する神話として展開されたものである。ここでは古訓に従って磐石を「カチハトキハ」と訓んでいるが、これは神仙思想と根を同じくするとしても直結はしない、日本人の一部が古くから有し、広く浸透していった石・磐には永遠の生命が存在するとする信仰がとつながっている。このことに注目するとき、吉野の巖の路頭にも神仙思想に限られない意味が有ったことが浮かんでくる。このことへの注意も必要であろう。

ところで、古代においては触れるだけでなく、見ることによっても生命の交感がなされると信じられ、融即、類感呪術が行われていたといわれる。土橋寛氏はこうした立場に立って「みる」ことの魂振を論じ、白馬をみることで長命を保てるという呪術的信仰に基づいて正月七日に催されていた宮廷儀式白馬の節会の後の宴で詠むための歌として大伴家持が前もって用意していたという『万葉集』の、

⑨ 水鳥の 鴨羽の色の 青馬を 今日見る人は 限無しといふ (二〇一四四九四)

という歌をその見る魂振を詠んだ歌の典型とし、この他、同じく『万葉集』の、

⑦ 日並皇子尊の殯宮の時、柿本朝臣人麿の作る歌一首〈并に短歌〉或る本の歌一首

鳥の宮 勾の池の 放ち鳥 人目に恋ひて 池に潜かず (二一一七〇)

⑧ 大津皇子被死らしめらゆる時、磐余の池の陂にして涕を流して作りましし御歌一首

ももつたふ 磐余の池に 鳴く鴨を 今日のみ見てや 雲隠りなむ (三一四一六)

右、藤原宮の朱鳥元年冬十月なり。

といった歌などをあげ、これらの歌は、見る魂振の為に水鳥を飼ったり、自然の水鳥を見たりして詠んでいると説かれた（前掲「国見の意義」）。

こうした呪術としての見る魂振に注目するとき、永遠の生命を保ち、成長し続けると信じられた磐・巖、常滑もまた見る、あるいは触れる魂振の対象たりえたと考えることができよう。持統天皇が宮滝の吉野の宮に行幸を繰り返したのも、神仙思想に誘われたというにとどまらず、そうした呪術的目的があつてのこととみることもできる。それはまた斉明天皇の吉野の宮の造営にも想定されることである。齊明紀には、

又、吉野宮を作る。 (齊明紀二年是歳条)

三月の戊寅の朔に、天皇、吉野に幸して、肆宴す。 (齊明紀五年条)

とみえる。斉明天皇の吉野の宮も宮滝の先に触れた梅谷醸造の地とされることは先に触れたが、ここには庭園も営まれたようである。これが営まれたのは、もとよりこの地の磐に対する関心が重要な意味をもったといえよう。こうしたことも視野に入れた上で、飛鳥における宮の石敷き、斉明天皇の二年是歳条の宮の東の山に天理砂岩で石の垣を巡らしたことをみると、どのようなこと浮かんでくるであろうか。

この宮の東の山というのは、酒船石のある山であることは先に触れたが、酒船石はその庭園あつたものとみられる。この山に天理砂岩の石垣が廻らされていたことは酒船石の西北西の登り口の途中でその遺構が発見されていることで知られる。石の山はそれ自体が永遠という意味をもつから、斉明天皇は吉野と同じく石のもつ力を常に感得できる場所を宮の近くに作り、常に石による魂振をしようとの思いがあつたといえるのではないか。とはいえその石の山は飛鳥においてそれほど特異なものであつたわけではない。なぜなら、天理砂岩の切石では無く、自然石であつたが、石葺の古墳が先行していたからである。現在欽明天皇松隈坂合陵とされる、梅山古墳などは、

砂礫を以て松隈陵の上に葺く。 (推古紀二十八年十月)

とあるように、葺き石がされていたといわれる。このような古墳を意識したのか、時代は下るものの、人麻呂が挽歌において、

御食向ふ 城上の宮を 常宮と 定め給ひて (二一一九六)

麻裳よし 城上の宮を 常宮と 高くまつりて 神ながら 鎮まりましぬ

(二一一九九)

と歌うのも、石が葺かれた古墳を永遠の宮とする意識も働いているとみることができる。

石の山は石の永遠性を意識したものであつたといえることができるが、酒船石の山の北麓の亀形石像物のところには明日香石の石張り、天理砂岩で囲われた湧水口も発見されている。その湧水を受けるのが、「亀は三千歳。」（『淮南子』詮言訓）といわれる、三千年の命を保つ亀の形の石造物なのである。この水溜は飲用にも禊にも用い得る装置となっている。両側にはやはり明日香石の石段が作られ、禊場とみると、小規模ながら谷川を利用し、その両側に石段を設けた弥彦神社の禊場と構造的には似ている。もとより、これは湧水を禊ぎ場とみた場合で、湧水に他の意味づけがなされていた可能性もないわけではない。すなわち、この南の丘の全てを石張りすることで、永遠の生命を保つ磐の山を作り、その磐山を染みとおった水が石の中から湧き出す施設を作つたとみると、解釈でしかないことであるが、これを特別の水として意味づける意図が働いていたのではないかと思わせるからである。

先の二つの記事、多武峰の観の記事と宮の東の山の記事は二つに分けて読むべきではあるが、また観と磐山にかかわる道教的な解釈も視野に入れるべきではあるが、さらに日本古来の永遠に生長を続ける石の山とみる必要もあるのである。石葺の古墳の造営なども日本古来の石の信仰に支えられて常

宮と意味づけられた可能性はあり、石の山もそうした意味の永遠性を担う造作物であったと解し得るであろう。これによって飛鳥の石の造作物のすべての意味を解けるとは思えないが、斉明天皇の吉野の宮の営造、飛鳥における石の造作、持統天皇の巨大な自然石の広がる吉野（宮滝）宮行幸の意味についても、このような信仰との関わりも視野にいれておくべきであろう。

天理砂岩で覆われた酒船石のある山の姿は異様なようにも思われるが、これも古代の天皇、特に斉明天皇の宮処のそして生命の永遠を願う思想を反映した、古代飛鳥の景観を構成する要素の一つであったということではある。それとともに、石に触れることによる、あるいは見ることによる魂振の対象としていたことが想定されるのである。

おわりに

ここには、木と石しか触れなかったが、『万葉集』には水鳥を見ての魂振、青葉、花を挿頭しての魂振も歌われる。こうしたものを総合してみると、飛鳥人たちは生命力の感染・融即を信じる世界に生きており、それらは、飛鳥に今も残る民俗、水口祭りに花を挿す習俗やお田植え祭りに男女の交合を演じる芸能にそれをなお遺っているといえる。もとより、これは飛鳥に限られるものではなく、稲作地帯にみられる習俗であるにしても、そうした心意が何らかのかたちで継承されているといえる。それはともかく、そうした日本人の古代的心意を深く潜めながら仏教や道教のあらたな意味づけも装いとして飛鳥の都の景観は形成されていたとみるべきなのである。そうしてその新たな装いの部分が、他と隔絶した景観をもたらしたと受けとめられるのであるが、基底に潜められた古代性もあったことを見逃すべきではないと考える。